

【素直さとずるさ】

今まで当たり前のように捉えていたことや、何度も聞いているし、自分がそのことに対して理解できていないなどと微塵（みじん）も疑問に思ったことがないようなことに着眼するのは、可能性の拡大という視点において極めて重要です。新しい、今まで知らないことを知ることが成長と捉えがちですが、今までの当たり前を見直してみることも新しいことを知ることと同様、いやそれ以上に重要です。この視点を持つことも「脳大成理論」を深めていく上でも、あなたがさらにデータフィールドのレベルの高い自己哲学を構築していく上でも必要且つ有益であると言えます。

この項では『素直』について考察していきたいと思います。

素直さは本物としてのあり方の土台と言えます。また、素直さは成長するための心の土台だとも言えます。『素直』とは一体何かということの多面的考察を試みましょう。まず『素直』の辞書的な意味は以下の通りです。

【素直】考え・態度・動作がまっすぐなこと。

- ①ひがんだ所がなく、人に逆らわないこと。心が純真さを失っていないこと。「一な子」
- ②芸芸などに癖がないこと。「一な字を書く」

このように①の意味は特に人格や人間性であると捉えられる意味合いです。

②の意味は日常では頻繁（ひんぱん）には使わないですが、意味として含まれるのは理解して頂けることと思います。持ち合わせる技術の質のことを表現しています。

次いで、素直の類義語は以下があります。

「純粹」「無邪氣」「無垢」「従順」「素朴」

更に、素直の対義語は以下です。

「偏屈」「強情」「意地っ張り」「ひねくれ者」「頑固」など。

こういった言葉の意味は、ある側面だと違和感なく当てはまるが、角度を変えると全く違った捉え方になったりします。「信念が強い人」と「頑固な人」とは同じ意味合い、同じ類いの言葉ですが、場所や状況で言われ方が変わったりしますね。

「厳しい人」と「優しい人」も、場面や捉え方で変わります。『本当に優しい人というのは厳しい人の事だ！』『厳しさの中に優しさがある！』という論調をあなたも聞いた事があると思います。私は「じゃあ、厳しい人じゃなくて、優しい人じゃない。ややこしいなあ。」などと思ったこともあります。つまり、その言葉に含まれる意味が文脈やシチュエーションによって変わるので。

そういった視点で「素直」というモノを考えた時に、実際に素直な人とはどんな人でしょうか？

## 脳大成理論 1-26

以下のような方は一般的に素直だと言われます。

- ・言われた事や指摘を受け入れられる
- ・自分のミスや間違いを認められる
- ・相手によって態度が変わらない
- ・相手の話を聞ける
- ・何事にも一生懸命

こんなイメージを少なくとも私は抱いています。

さて「素直」というのを人間性やココロの綺麗さ、純粹さ、と捉えている方がほとんどなのですが、次のようにも考えられないでしょうか。

私のビジネスの師匠は、非常に頑固で信念の強い人です。こうしたほうがいいと言ってもほとんど聞き入れません。レストランに入って、そのレストランで私が過去に食べた美味しかったものを勧めても、ほぼ賛同しません。必ず自分の食べたいものを注文します。また、ファッションにおいても、こっちの方が絶対にオシャレだと言っても全く聞き入れません。また、何か功績を作った時に賞賛しても、そのまま受け入れません。必ず何か皮肉った一言を付け加えます。何かプレゼントをしても喜んでいることは表情で読み取れますが、何か一言文句を言います。

あなたがもしこのような人と関わったなら「この人は素直じゃないなあ…」と思うことでしょう。大概の人はそう思うはずです！

しかし彼は、今までたずさわったことのない未知の領域で、且つ彼が強く関心を寄せていることとなると途端に反応や対応が変わるのです。例えば、メンタルのことやセルフコントロールのことであれば、「ああ、そうすればいいんだな…」「分かった、そうしてみる」と別人のように聞き入れますし、誰よりもたくさん質問をしてきてくれます。

『素直とは、人間性やココロの綺麗さである。』という捉え方をしている前提で、あなたが接した相手に対して「素直じゃない」とあなたが感じたり思ったりした時、そう思った相手とのやり取り以外でもその相手に対して「素直じゃない人だ」という認識は拡大していきます。そしてそれは自分に対しても同じです。「私は素直じゃない」「私は素直になれない」と自分を評価すると、その範囲はさらに拡大して、新しいことに対する取り組みへの抵抗感や自己肯定感の低下を作ってしまいます。

素直という心理状態が定義付けられないものなので、脳科学で説明するのは非常に難しくはありますが、敢えて脳科学の視点から素直を定義するなら次の通りです。

あらゆる情報を自身の価値感で判断せず情報として受け入れられる状態。

良い情報・悪い情報、有益な情報・不利益な情報という事前の解釈を通さず、自身の価値感から外れる内容でも否定せず受け入れられる心理状態。

## 脳大成理論 1-26

脳にはインポートデータがあり、インポートデータによって情報のふり分けを無意識に行っています。つまり、無意識脳は自分が重要だと考えている世界以外に意識を向けさせないようにしています。よって、インポートデータが書き換わり、今まで脳がふり分けをしていた情報を脳が受信・入力するようになった、その情報に対するあり方が『素直さ』だと言えるのです。

すると、脳大成理論の基礎概念である「フェイクと本物さ」にも繋がってくると思います。

つまり、『素直とは成長を望む意識』であり、人間性やココロの綺麗さではないのです。

『素直』を上記の概念で理解した時、あなたは中々聞き入れない人に対して「この人素直じゃないなあ」という捉え方ではなく、「ああ、この人は成長を望んでいないんだなあ」と捉えられるはずです。その人はあなたの提供する情報や内容に関心がないのです。あなたの提供する情報が、相手の脳にとってインポートデータ外なのです。そう捉えると『素直さ』は、人間性やココロの綺麗さとは無関係ですから、人格否定には至りません。さらに、あなたがどうしてもそのことを相手に伝えたいのならば、あなたの伝え方を変化させようと思うはずです。

さてこの時に、『なんで伝わらないんだ。なんてバカなんだ。私が成長しなきゃいけないのか？いや、私の価値に気付かないあなたが成長しなきゃいけないんだ！』と考える人がいますが、これは『素直』の捉え方を間違いなくはき違えています。

しかし更に大きな問題は「素直さとずるさが近いところにある人」です。言葉は辛辣になりますが、『自分は素直で真面目で不器用な人間だ』と思っている人ほど「ずるい」人が多いのです。ここでの問題はその人がずるいかどうかではなく、その人が「自分はずるい人なのだ」と微塵（みじん）も思っていない、自分にはずるさなどない。」と思いついでいる所にあります。

このことを理解して頂くために説明を加えます。

「善と悪とはその手法においては同じである。」ということをおさえてください。詐欺師が自分の利益のために人を騙す際に用いる手法と、カウンセラーやセラピストが、クライアントを目標達成や悩みの解決・課題のクリアに導く際に用いる手法は、手法においてほぼ同一なのです。別の例を言えば、相手を呪うのと、誰かの幸せを願うというのでは、「祈る」「そのことを集中して強く意識し続ける」という手法において全く同じなのです。かたや詐欺師、かたや人を幸せに導くカウンセラー。かたや呪い、かたや祈り。手法は全く同じであっても、ここまでも大きく違ってくるモノなのです。つまり「自分のために、自己利益のために、利己的に」行っているのか又は、「誰かのために、他者利益のために、利他的に」行っているのかの違いだけなのです。

前者の人間が、技術や知識を習得したのであれば、それは「ずるさ」を拡大させることになるでしょう。逆に後者の人間が、技術や知識を習得したのであれば、それは「うまさ（巧みさとも言える）」を拡大させることになるでしょう。

## 脳大成理論 1-26

よって、善意か悪意かということが、ずるさとうまさ（巧みさ）の違いだと言えます。

先ほどの話しに戻ると、「自分には相手に対する悪意がない」と思っているがゆえに自分はずるい人間ではないと思ってしまうのでしょうか。しかし、自分は素直だと思っている人がさらに自分の不器用さや弱さがゆえに「自分を守るためだけ」に成長しようと考えているのなら、それは『自分のことしか考えていない』ことになってしまっているのです。本人にとっては不本意でしょうが、それは紛れもなく「ずるさ」に当てはまってしまうのです。

つまり、本人に悪意があるかどうかは問題なのではなく、「自分のことだけを考えて、自分を守るために成長を望む意識」がどれだけ無意識に潜んでいるかが問題なのです。無意識脳の視点から言うと、その意識がどれだけ潜んでいるかと、その人の「ずるさ」は比例関係だと言えます。そして、そのずるさは無意識が故にゆっくりとその人を蝕んでいきます。自分では、もはや自覚できないレベルで無意識脳に定着していき、その人のココロを腐らせていきます。

すると、その人は「接していてもとても誠実だし、素直だし、悪い感じはしない。でも、なぜか信頼できないんだよね。」と評価されるような人に陥ってしまいます。

素直さとは『成長を望む意識』です。しかし、その成長を望む理由が、『自分を守るため、自己利益のため』なのか、『誰かを守るため、他者利益のため』なのかによって、ここからの未来が大きく変わります。成長を望み、学び、必死に実践し技術を磨いた先にあるのが、「ずるさ」なのか「うまさ」なのか。

前者は孤立し、後者はココロの通うたくさんの仲間にも囲まれることでしょう。

ずるさがない人などいるのでしょうか。また、ずるさなんて自分にはないと言い切れる根拠は存在するのでしょうか。であるならば、自分にも当然「ずるさ」が潜んでいると決めつけ、自分を見つめることこそが本物さを磨くことになるのではないのでしょうか。

成長を望む意識、そしてその理由。ここを意識して、学ぶプロセスにおいて、自分にずるさがないかどうかを厳しく自己チェックしていきたいものです。